北嶺会だより

号外

校訓
覇気　信念　明朗

後藤英鵬　書　（県三）

発　行　県立富士宮北高等学校同窓会 北　嶺　会
静岡県富士宮市宮北町230（北高内）電話（0544）27－2533㈹
編　集　北嶺会広報委員会
印　刷　㈱きうちいんさつ

平成20年4月1日　撮影

（平成19年11月２日　創立70周年記念式典より）

北嶺会会長
西川恒彦

本日の創立七十周年記念式典を迎えるにあたりましては、二〇〇四年六月、日野原前学校長より実行委員長就任の要請を受け、第一回の委員会を開催してから三年半、北嶺会、体育文化後援会、ＰＴＡ、学校の真摯な取組により迎える事ができました。その間、北嶺館建設と評伝・望月軍四郎の復刻版発刊、七十周年史発行を終え、本日の式典後からは、北嶺館備品の拡充・中央並木道、紅葉山・平三総体記念の皇太子殿下お手植えの『楠』の移植と進んでまいります。中央並木、紅葉山・お手植えの楠の移動は、季節の制約もあり、今年の冬から来春にかけて順次行ってまいります。

これらの記念事業には、北嶺会会員から六千二百万円余、また、会員以外の方々より一千五百万円余の尊いご寄付を頂戴いたしました。目標額には、まだ五千三百万円不足しておりますが引続き事業推進のためご協力をお願いしてまいります。中央並木道・紅葉山整備は五十周年の際、記念事業として検討されましたが、五十周年記念庭園のある場所が当時荒れ果てていたため、庭園事業に集中し、断念した事業でございます。

また、北嶺館は、岡村元会長が就任した直後、北嶺荘が、男子用に作られており、手狭で、老朽化が激しく、毎年の補修費が掛かり、学校側から北嶺会に建替えの要請があり、要請に応え北嶺館建設の積立を開始いたしました。その後、市野・清・深澤会長と引継がれ、二十年の歳月を経て、昨年三月十七日に完成し、必要最低限の備品を入れ、五月から合宿に補習にと使用を開始いたしております。

これらの記念事業には、過去において北嶺会または先輩会員から多額の寄付を頂き維持してまいりましたが、私立時代の卒業生は既に第一線から身をひかれ、後継者が他校の出身となるなど今後は従来の様には行かない時代に入っており七十周年を最後の機会と捕らえ、記念事業を決定いたしました。

さて、本日の創立七十周年の記念式典では、創立者の望月軍四郎先生に報恩感謝を陳べなければなりません。

先生は、株で利益を上げスタートしましたが、三十八歳の時にはすでに青年実業家として活躍されました。手腕を最も発揮したのは会社の再建でした。一九二九年、ニューヨークから始まった世界大恐慌は、わが国も昭和大恐慌となり、現在の一部上場企業の前身であります多くの企業が倒産寸前となりました。

その様な中で、先生は多くの企業から請われて、再建に乗り出し、無価値に近い株式を買い取り、その資金を元に再建すると、その株式を再建企業に譲渡し、上がった利益を育英資金として、学習院・慶応義塾・早稲田・東大・現在の筑波大学の前身、東京教育大など多くの学校、学生に援助の手を差し延べました。また、第一次世界大戦に破れ、困窮の底にあったドイツ学術振興会に二百万マルクの資金を寄贈し、ヨーロッパでは広く新聞で報道され、ドイツ大使が望月家を訪れ謝意を陳べています。大正八年には、険悪な状況の日中関係を憂い、日中親善のため中国研究と中国留学生のための寄宿舎を作るなど育英事業は海外にまで及んでいます。

他方、郷土富士宮には、大宮小学校の講堂、貴船小学校の敷地購入、富士高などに及び昭和十二年には、母校である、富士宮北高等学校の前身、大宮工業学校・大宮商業学校を創立されました。

当時、町民から実業学校が欲しいとの要望がありましたが大宮町では財政難から実現できず、その事を知っていた先生は、昭和九年、浅間大社に回廊を寄進し、その竣工奉告祭に出席した帰り、実業学校創設の構想を大宮商工会で語り、昭和十一年には三万七千坪の土地を買い取り、昭和十二年十一月十七日文部省の認可を受け、『国家有用な人材の育成と郷土の産業の発展』を建学の理念として、昭和十三年四月、四倍の競争率を勝ち取った第一回生が入学し、『覇気・信念・明朗』の校訓を定め、開校は順調なスタートをいたしました。先生は「この学校はいち望月家のものではない、郷土大宮町のものである」と開校式にも出席いたしませんでした。昭和二十八年静岡県に無償で移管できたのは、その思想からでした。

先生は、開校して二年二ヶ月後の昭和十五年二月一日に突如、心臓病で急逝されました。

先生が生涯をかけて育英に取組まれたきっかけは、大正七年、三十九歳の時、東京府からアメリカ・カナダの実業視察を嘱託され、その視察から『国家有用な人材の育成』を痛感されたからだと推察できます。先生の生涯は、報恩感謝を育英に捧げた人生でした。

私事ですが、私が小学校六年生の修学旅行に行く朝四時、父から「人は一生懸命働けば、稼ぐに追いつく貧乏なし　と言って必ず金はたまる、その溜まった金の使い道ほど難しいことはない、お前は今日から金の使い方を勉強しなさい」、と教えられました。そして実社会に出て、その難しさを痛感しています。

先生は質素、倹約を実践し、ひとたび援助の要請があれば、熟慮し納得できれば現在の米価換算で五十億、百億の単位で援助をいたしました。いっぽう、「社員の給与は何処よりも良かった」と取材の際、梅沢理事からはお聞きいたしました。

北嶺会の会則には、望月軍四郎先生の建学の理念を守り、「会員間の友誼を厚くし、母校の発展に寄与する」と書かれています。

創立70周年を祝して

校長　笹原正和

菊の香りも高きこの佳き日に、静岡県立富士宮北高等学校、創立七十周年記念の式典を催すに当りまして、静岡県教育委員会遠藤亮平教育長様、静岡県議会議員吉川雄二副議長様、富士宮育英財団望月耕次理事長様、静岡県高等学校長協会岩崎功会長様をはじめ、多数の御来賓の御臨席を賜り、ここに盛大な式典を挙行出来ますことは、誠にありがたく、心より厚く御礼申し上げます。

また、本校創立七十周年記念事業実行委員会をはじめ、北嶺会、体育文化後援会、PTAおよび学校後援会の皆様方、並びに、地域の方々の温かい励ましを支えに、本日を迎えることができました。皆様のお力添えに心から感謝申し上げます。

創立七十周年を迎えるに当り、記念事業として実行委員会には、生徒の人格陶冶や心身鍛錬の場としての、新生活館の建設を計画していただき、県当局を始め、北嶺館建設委員会を中心に関係各位の御協力を賜り、昨年完成し、本校あたり、一期から十期生にお集まり頂き母校を語る会で多くの先輩諸兄から、私と同じ思いをお聞きいたしました。出席できず手紙を頂いた中にも、北高を出て良かった、校訓に支えられた、とありました。私たちは、母校で先生方、先輩諸兄に教えられた、これらの教えを後輩に伝え、在校生諸君は、後に続く後輩に伝えていって頂きたいと念願しています。また、笹原校長始め諸先生方には、切にご指導のほどよろしくお願いいたします。

終わりにあたり、北嶺会役員として二十二年間、八面六臂の活躍をされ、私と連れ立って募金活動中、突然腹痛を訴え、帰らぬ人となった七十周年副委員長の渡辺俊六君に哀悼の誠を捧げ、本日の創立七十周年式典を新たな一歩として母校の発展に寄与する事を、北嶺会を代表してお誓い申し上げ、創立七十周年記念実行委員長としてのご挨拶といたします。

発展の一つの場として、生徒たちが多いに活用させて頂いております。

また、昭和十七年に発行された、「武者小路實篤著　伝記『望月軍四郎』を、北村美遵先生により、全面的に書き改めていただき、「評伝　望月軍四郎」として発行し、生徒たちには、卒業記念品として北嶺会から贈呈して戴いております。

本日発行の七十周年記念誌につきましても、探せる限りの過去の文献資料、創立時のことを御存知で御存命の方々の証言を加えて、草創期から十年程度を一つ一つの区切りとして、写真と文章で構成されております。七十周年の区切りとして素晴らしい記念誌となったと思います。

さて、本校の沿革をひもといてみますと、大正から昭和にかけて財界で活躍された、郷土出身の実業家望月軍四郎氏が、昭和十二年、「両親の遺徳を顕揚するため、大宮町のため、富士郡のため、故郷に対する感謝の念から」設立した、財団法人大宮育英財団の「静岡県大宮工業学校・静岡県大宮商業学校」にその源を発しております。昭和十三年四月、大宮商工学校の記念すべき第一期生の入学式が行われました。翌年行われた開校式において、相葉繁校長が挨拶の中で、「我が校の訓育目標は、覇気・信念・明朗の三項目であり、教育にあたっては、熱と愛と誠の三徳目をもって導く」と述べ、後に軍四郎氏が承認したものが、校訓「覇気・信念・明朗」であり、現在まで七十年間引き継がれてまいりました。

昭和十七年六月、富士郡大宮町は、富丘村と合併し、市制施行によって学校名も、富士宮工業学校、富士宮商業学校へと変更されました。また、大宮育英財団も富士宮育英財団に名称変更されました。そして、校名変更間もない同年十二月に本校の記念すべき第一回卒業式を迎えましたが、戦争の影響で、三ヶ月短い、いわゆる「繰り上げ卒業」でした。戦時中、富士宮商業学校は廃止になり、富士宮工業学校も、軍需工場となったときもありました。

戦争という不幸な時代を経て、昭和二十一年再び富士宮商工学校として戻りましたが、昭和二十三年四月富士宮商工学校は廃止され、新たに化学科、機械科と商業科を持つ三年制の私立富士宮実業高等学校として、再出発しました。

昭和二十七年四月には、三十六名の女子生徒が入学しました。本日ご列席の北嶺会副会長の市川緑様は、その時の一人でございます。翌年の昭和二十八年四月に県へ移管され、普通科と商業科を併設する、現在の形の「静岡県立富士宮北高等学校」になりました。

このとき、校章が、創立当初からの「桜の花と富士山に高の文字」に、北高を表すため、真北に位置し、古来、暗夜航海中の船にとって唯一の道しるべであった北極星をもって、北の印とし、現在の校章になっています。校訓である「覇気・信念・明朗」は、創立当初のまま、今

（平成19年11月２日　創立70周年記念式典より）

日に至っています。

県立移管の前後数年は女子生徒がいましたが、その後、女子生徒の入学はなく、事実上男子校であった本校は、独特な雰囲気があったようです。「北嶺精神」と言う言葉が使われるようになり、『北嶺賛歌』が生徒と、野村藤雄元教諭によって誕生しました。創立記念行事として、「富士の巻き狩り」「富士山お中道巡り」「十里木強歩」が三大行事として実施されました。昭和三十八年に宿泊研修施設「北嶺荘」が完成しました。

また、柔道を「校技」と定め、三十九年から六十二年までは、校内柔道大会が行われ、昭和四十一年には、野球部が、第三十八回全国高等学校選抜野球大会で甲子園に初出場を果たしました。

この頃は、運動部も、文化部も華々しい活躍を見せていました。相撲部の金沢大会における全国優勝、陸上部は駅伝競走において県で連覇、庭球部現在のソフトテニス部、卓球部、将棋部も全国大会に出場しています。進学でも実績を上げ、「文武両道」の学校として知られるところとなりました。男子校としての北高は活力があり、時にはエネルギーが余ってトラブルを起こすこともあったようですが、おおらかで、バンカラで、まさに、よき時代の高校であったと聞いております。

昭和五十三年の春、二十五年ぶりに女子が入学し、県立高校として最後まで残っていた唯一の男子校に、終止符が打たれ、男子校北高は男女共学高校として、新たなスタートを切りました。

この頃の出来事としては、昭和五十二年の相撲部全国優勝、五十五年野球部二度目の選抜高等学校野球大会甲子園出場などがあげられます。平成三年の全国高校総合体育大会の時には、相撲競技の会場となり、皇太子殿下の行啓を仰ぐという晴れがましい出来事もありました。恵まれた環境の中で育った卒業生の中には、陸上のオリンピック選手、関取、プロ野球選手も生まれております。

現在の北高は、創立者望月軍四郎氏が「富士の雄姿を真正面に眺めることが出来る」と選定した、現在の宮北町に、東京ドームが二つ半入る三万二千坪あまりの広大なキャンパスで、三棟の校舎、七十周年を記念して作られた真新しい北嶺館、家庭科棟、二つの体育館、武道場である北辰館、専用の野球場、四百メートルトラック、相撲場、弓道場、プール、六面のテニスコートと、県内随一の施設を有しております。校地の真ん中を東西に横切る三百メートル余りの中央道の両脇には、創立当初に植えられた桜とイチョウが交互に枝を張り、春は桜のトンネルを、秋は黄色く染まったイチョウ並木と、季節ごとの素晴らしい景観を見せてくれます。

このように恵まれた自然環境の中で、生徒たちは、実にのびのびと青春を謳歌し、部活動に積極的に参加しております。部活動を通して、人格を形成していくことも本校の特色と言えるでしょう。

近年におきましても、男子ソフトテニス部、女子ソフトテニス部、弓道部、相撲部、陸上競技部、バドミントン部などが、全国大会に出場し活躍しております。また、これらの恵まれた環境は、本校の生徒だけでなく、地域の人々にも利用されています。早朝や夕方の散歩に利用する人、放課後や休日に体育館、グランド等の学校施設開放を利用する子供から成人まで、施設開放を利用するグループは、年間五百を超え、非常に高い利用率を誇っています。

これも、北高の環境の良さと、地域に愛されている身近な学校の証であると感じております。

昨年、戦後初めて教育基本法が改正されました。それにともない、いわゆる教育三法も新たな制定が進められています。静岡県に於きましても、少子高齢化の社会変化に対応した、高校再編が進められております。本校は創立のいきさつや意義、そしてこの恵まれた教育環境などから、地域に必要な学校として、教育の不易の面では、普通科商業科併設の利点を生かし、運動部・文化部の部活動を通しての人格育成に努めて参りたいと考えています。

また、流行の面としては、時代の変化や地域のニーズに対応し「生きるちから」を身につけさせ、今後も地域との連携を進め、産業開発や文化振興等、地域の発展に寄与する若者の育成を図っていきたいと考えています。皆様のご指導ご鞭撻をお願いします。

つぎに生徒諸君に一言申しますが、本校は七十年前に、望月軍四郎氏が私財を投げ打って作られた学校に端を発しています。建学の思い、伝統を引き継がれてきた先輩諸兄の心の重みを再確認し、後輩に残していく責任があります。

この記念すべき日に、創立宣言書を思い起こし、質実剛健、不撓不屈の精神と、人物鍛錬に重きを置き、感謝の心と、有為な人材となるよう人格の完成に努力してほしいと思います。激動する社会の構造変革や情報の氾らんする社会の中で、不易と流行のバランスを失わず、本校の校訓「覇気・信念・明朗」の教えを胸に秘め、高く理想を掲げ続けることを期待します。

北高の広大なキャンパスには、「元気な挨拶と、爽やかな笑顔」が似合います。目標を持って、将来を熱く思いながら、常に現在あるべき姿を見極めつつ、栄えある歴史と伝統の本校に、更に新風を吹き込めるよう、一層学業に、スポーツに精進努力し、一歩一歩着実に歩んでいくことを諸君に望みます。

最後になりましたが、本日御列席の皆様方のさらなる御指導・御鞭撻を賜りながら、本校が益々発展いたしますよう、教職員一同鋭意努力する覚悟でおりますので、今後とも一層の御支援をよろしくお願い申し上げまして式辞と致します。

創立70周年を祝して

在校生代表　小塚　扇帆代

静岡県立富士宮北高等学校創立七十周年の佳節にあたり、ご来賓の方々をはじめ、多くの関係の皆様のご臨席をたまわり、盛大に本校創立七十周年をお祝いできましたことを、在校生を代表して感謝申し上げます。

中学生のころ、北高は私にとってあこがれの学校でした。このあこがれの北高で三年間を過ごし、卒業を間近に控えたいま、私にとって北高とは、無限の可能性と夢を与えてくれた場所であり、かけがえのない仲間との友情を深めるための場所であったと実感しています。

私は一年生の後期から生徒会の仕事に携わってきました。生徒会活動を通して、何事にも責任を持って考え、行動することの重要さ、仲間と協調してゆくことの大切さを学びました。

そして、創立七十周年という節目の年に生徒会長となり、生徒会活動、さらに最大行事である北嶺祭の運営について責任を担う立場となりました。今年の北嶺祭は、北高の良き伝統を継承しつつ、新しく飛躍してゆく姿も表現したいと思い、生徒会執行部でテーマや内容について真剣に議論を重ねました。

今、北高に学ぶ私たちは、未来にむけて開くべき扉を探している最中なのではないか。しかもその扉はひとりひとり、形も色も大きさも異なるものではないのか。北高での三年間は、この自分だけの扉を開くための鍵を自らの手で見つける時間でなければならない。ただいたずらに時を過ごすのではなく、夢を叶えるための貴重な高校生活であることを生徒全員が自覚し、もっと今を大切にしてゆきたい。こうした願いを込めて、今年のテーマを「十人十扉」と決めました。「好みや考えは人によってそれぞれ違う」という意味の「十人十色」の「色」を「扉」という言葉に変え、この「扉」という語に生徒各人の目標や夢、希望という意義を込めました。そして全校生徒が自分の将来の夢を一枚のカードに綴り、そのカードを組み合わせたモニュメントを製作することにしました。私はこのカードに「保育士になる」という将来の夢を書きました。子どもの個性を引き出してあげられる保育者、子どもが未来の夢の扉を開くための鍵を探す手伝いができる保育者になることが私の目標です。

さて、本校がこの富士宮の地に誕生して七十年。中央道の四季を彩る桜といちょうは第一回の卒業生の方々が、記念に植樹されたものです。当時は背丈ほどの高さだったそうですが、七十年という時を経て今では大木に成長しています。本校も「ひと」で言えば古稀を迎えることとなりました。さまざまな経験を重ね、苦労を乗り越え、ますます円熟の域に向かう年齢であるといえます。今後八十周年、九十周年そして百周年には、北高はどんな扉を開くことになるのでしょうか。創立以来の本校の校訓である「覇気・信念・明朗」に即して、私なりの北高の未来像を考えてみました。

まず「明朗」についてですが、北高にみえたお客様は、みな口々に北高生の清々しい挨拶を褒めてくださいます。明るく、元気な声があふれる北高、この良き伝統は今後も第一に守ってゆくべきものと思います。「明朗」を辞書で調べると「明るく、朗らかなこと、うそやごまかしがなく、明るいこと」とありました。昨今、「うそ」「ごまかし」にまつわる残念なニュースをしばしば耳にします。北高はこうした社会の風潮とは無縁でありたい。いつも北高を見守ってくれる、けだかく美しい富士のように「明朗」な生徒が集う学校でありたいと思います。

次に「覇気」。北高は全国屈指の十一万平方メートルという広大な敷地を持っています。体育館をはじめ、多くの施設は毎年めざましい活躍を続ける運動部だけでなく、多くの地域の方々にも利用していただいています。休日でも生徒や地域の方々の覇気あふれる元気な声が聞こえてくるのが北高の特徴です。私は北高が地域の拠点として、もっと大きな役割が担えないだろうかと感じています。北高の校章は「北辰」すなわち「北極星」を意味しています。地域の方々と生徒が一緒になって取り組める文化祭や清掃活動、防災活動などを行って、地元と密着し、地域にいっそう活力を与え、元気にしてゆける羅針盤の役割を果たす学校になって欲しいと思います。

最後に「信念」です。北高がこれからも保ち続けてゆかねばならない信念とは創立者・望月軍四郎先生の掲げた理念ではないでしょうか。先生は「人と生まれた以上、社会のためになることをし、社会に役にたつようにならなければならない。そうでなければ、人生の意義はない。」「学問技術だけでなく、精神修養を教育の根本にしたい。」という理想のもとに北高を創立したとうかがいました。どのような団体や個人も「創立の志」である「原点」を忘れて未来の発展はありません。先生はお亡くなりになる前年の昭和十四年十二月に、当時の生徒たちに次のようなお話しをしてくださったそうです。「人は報恩感謝の念が欠如していても、立身もし、成功することがある。しかし、そういう人はなんとなく明朗を欠き、さわやかさがなく、けっして円満な人格者とはいえない。どうか諸君は勉学修養に努めると同時に、ますます報恩感謝の念を養うことを心がけていただきたい。」

昨年は同窓会の皆様のご尽力で北嶺館を建設していただき、合宿に、勉学に存分に利用させていただいています。諸先輩の北高の発展を思う心を、在校生である私たちは当たり前のこととせず、常に感謝の気持ちを持たなくてはならないと思います。

北高時代に描いた理想を生涯持ち続けること、勉学を基礎に人格を磨き、育てていただいた郷土への報恩感謝の念を忘れずに、社会に貢献してゆくことをお誓いするとともに、本日参加された皆様が、本校が輝かしい未来の扉を開いてゆく姿を今後も見守っていただけますようお願い申し上げ、代表のご挨拶といたします。本日はたいへんにありがとうございました。

第一部　記念式典

70周年を振り返って

受付風景

会場入口

西川恒彦北嶺会会長

笹原正和校長

壇上全景

会場風景

ご来賓の皆様

実行委員会役員

小塚扇帆代在校生代表

桜井秀征PTA会長

第一部　里見浩太朗記念講演とショートステージ

ショートステージ

記念講演

北高生よりお花の贈呈

第二部　里見浩太朗オンステージ

会場を魅了

小室直義市長より花束贈呈

開場前の長蛇の列

会場満杯

実行委員役員と記念撮影

笹原校長のツーショット

記念事業

北嶺館『望月軍四郎記念館』　建設

北嶺館と富士山

北 嶺 館 全 景

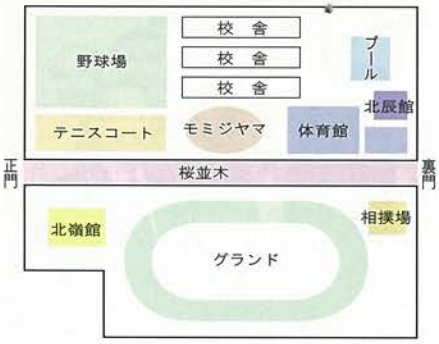
モミジヤマ　整備

紅葉山もすっきり

桜並木道　整備

70 周年補植の桜も満開

■北高略図



評伝「望月軍四郎」　発刊
70 周 年 記 念 誌　発刊

創設者 望月軍四郎 翁